
生体兵器の少女

鳥山and矢吹and尾田先生が神！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生体兵器の少女

【Nコード】

N8450T

【作者名】

鳥山 and 矢吹 and 尾田先生が神！

【あらすじ】

突如、ナノマシンを入れられて、殺人兵器にさせられた少女が、そんな自分の運命を変えようと、世界中に旅立つ。

そこで自分が本来何者であるかを思いだし、自分の運命には逆らいながら、自らの力で明日を切り開く。

生体実験！？（前書き）

まだ、連載中の小説があるので、不定期連載とはなりますが、二次小説を書かせていただきます。

生体実験！？

あれ・・・？

あたし、どうしたの？

体が動かない・・・。

それに、手足を広げられて、まるで、万歳をしているみたい・・・。
振りほどこうともがいてみたものの、全くをもって無駄な行為だった。

そもそも、ここってどこなんだろう？

謎である。

頭には「？」が飛び交う。

全てがわけわからない。

なぜなら、ついさっきまであたしは、バスに乗っていたはずなのだ。

あたしは普通の高校生だった。

そして、何も、考えず、ぼうっとバスの外を眺めていたはずだった。

そしたら、急に眠たくなって・・・。

気がつくと、こんな状態・・・。

誰だってワケわかんない。はずだ・・・。

小説のプロローグとかじゃないんだからさあ・・・。

いままで読んでいた小説の主役の皆様・・・。

すみません。ベタな展開っていつて・・・。

いきなりこんな転生的なこと起きたら、誰だってパニクるよね。

そうこう言っている間に、目が馴れてきた。

ここはよく見ると、実験室のようだ。

数々のやばそうな機械たちが動いている。

あたしは、両手両足を広げられて、束縛されていた。
動かすと腕に痛みがはしった。

革製の拘束具があたしの腕に食い込むからだ。

しかし、こんな状況、絶対普通じゃない・・・。

あたしは暇になれば小説を読んだ人だ。

このようすで、次のプラグは・・・。

生体実験。

この数多い、機械。

そしてところどころに見える、カルテらしいものや、手術道具らしいもの……。

これから想定したところ、こんな予測がたつた。

だからってどうしようってんだ!?

こんな状況乗り越えられるのは、漫画の主人公か小説の主人公くらいのもんよ!?

あたしはまだ、転生したとは思ってない。

だから、まだ、そんなパワーがあるとは信じない。

どうこうしているうちに、化学者らしき人物数人が集まった……。

彼らはいったいなにもの？

『目が覚めたかね？試作型T-01』

あたしを機械みたいな呼び名をしたのは、どのどいつだ？

上を見ると、髭を生やした、じいさんが窓の奥から喋りかけている。あたしはもう、予感した……。

絶対に生体実験だ!!

「……………!!」

あたしを出して、と言おうとしたが、声が出ない。
どうしてだろう？

何度と声を出そうと試みたが、全く無駄だった。

『無駄じゃよ。お主の声帯はまだ未完成状態にしてあるからな』

『いつもと同じように、貴様にいくつか質問をする。その質問に対して、YESなら、右手を広げる。NOなら左手を広げる』

答えなければならないのだろうか・・・。

いやだよ。早く出しなさいよ！

あたしは、そっぽを向く。

『答えなくないのか？』

右手を広げる。

『だったら、そのまま、じっとしていたいのか？』

左手を広げる。

『お前は賢いか？』

知るか！！

無視！！！！

『最後の質問だ。お前は自分がなにものか、分かるか？』

左手を広げる。

最終実験を開始する。

あたしに麻酔が注入され、深い眠りに落ちた・・・。

イヴと主へマスター（前書き）

????と思われた読者も、「ああ」と思われた読者もおられると思いますが、まんまです。

イヴと主へマスター

あたしが次に目覚めたのは、何やら、檻のようなところの中でだった。

「ここはどこ!？」

自分でもはっとした。

やっと声が出たのだ。

声って何て良いものだろう。

自分の声に酔しれた。

「やっと目を覚ましたか・・・」

あたしに気がついたのは、へんなおじいさん。

RRと書かれた変な帽子を被った、白い髭のおじいさんだった。

「お前は確か、試作機T-01だったな。ここでは、そんな長つたらしい名前では呼びづらいな・・・。よし、貴様は史上初の人間型の生体マシンだからな。神話から名付けて、『イヴ』と呼ぶことにしよう。

ちなみに、ワシはドクター・ゲロと呼ばれておる。が、お前は、主マスターと呼ばばいい」

イヴ?

イヴ、イヴ、イヴ・・・。

ブラックキャットじゃないか・・・!!

鏡を見る。

すると、漫画に出てきた、イヴの顔が、そのままそこにあったのだ。

あたしは漫画もよく読む。

その中で、ブラックキャットもお気に入りの一つだ。

こりゃ、完全に信じないといけないみたい……。
この転生物語を。

ああ……ベタだ……。ベタすぎる……。

思わずあたしが考え事をしてしていると、

「これ。さっさといくぞ！」

頭を捕まれる。

せ、せつかくのトレードマークが……、
痛いっ痛いっ痛いっ！

連れてこられたのは、何やら大きな広場。

そこには、何やら数人の人がいた。

「イヴ。お前は鬼だ……。鬼は人間を狩らなくちゃならない。そう
うだろ？」

何やらどこかで聞いた言葉。

しかし、言っているのは、残虐な顔をした、豊かな腹を持つトルネオではなく、別の漫画で、人造人間という抹殺兵器を作ったキャラ。ドクター・ゲロなのだ。

ややこしい・・・。

でも、イヴなら、トランス能力を使いこなすことができるはず。とりあえず、なんとなく、軽い気持ちで

トランス
変身！！

ピキピキピキッ

残虐な形をした、サーベルに右手を変化させた。

かたちが何やらグロイ。

何でこんなものを想像したのか・・・。

ズギヤッ

剣を振る。

人に命中した。

音と共に、真っ赤な血が切り口からあふれでる。

それを見た途端、彼らの目は恐れをなし、ライオンに追われるウサギのように変わった。

心臓に直接的なダメージを与えたわけではないから、死にはしないだろう。

「ゲ、ゲロさまっ！た、助けて・・・！」

さつき切った人が、そう言い、主にかけよった。

「おい。とどめをさせていないぞ。爪が甘いのはいかんぞ、イヴ」

「はい・・・主・・・」

あ、あり・・・？

あたしの意思に反して動くんだけど・・・？

あたしの剣は真っ直ぐに心臓を貫こうとする。

・・・。。。

あとのことは、グロすぎて説明できない。
というか、したくないっ。

一日が終わった・・・。

今日は、一日で色んなことがあった。

はたして、何をしたらもとに戻れるのか。

謎ではあるが、しばらく様子を見ることにしましょう。
眠い・・・。

生体兵器でも眠たくはなるんだね・・・。

次の日。再び、集められた人と鬼ごっこ・・・。

次の日も、

次の日も、

また、次の日も・・・。

気がつかない間に、あたしは、主の純粋な道具になっていた。

そんなある日、

「ゲ、ゲロさまぁ、お許してください！」

「ふん。もう遅いわい」

もう彼らは腰が抜け、動けなくなっていた。

「なあ、イヴや。さつさとやっちまえ」

「はい・・・主・・・」

あたしは剣を空高く振り上げた。

しかし、ここからいつもと違う。

ドカーーンッ

ばかでかい音と共に、一人、やって来た。

「おいっ！その女の子！そんなもの振り回したらあぶねーだろ！

んなもの、鬼ごっこじゃねえっ！鬼ごっこはもつと楽しいぞ！」
やって来たのは、装飾銃を持ったサーティーンのタトウーを持った男。

じゃない。

右の目の下に傷があり、見た感じから全くを持って無鉄砲そうな麦わら帽子を被った青年だった。

一瞬誰かと分らなかったが、ぴりぴり感じる殺気……。
あれは、モンキー・D・ルフィ……。

「なんだ？お前は？」

主が反応する。

と、いうか、このわけの分からない状況は何？

どの漫画か分からん。

ごちゃごちゃすぎる！

「イヴや。こいつも鬼ごっこに入りたいようじゃぞ、相手してやれ」

ルフィのすごさはよく知ってる。

でも、あたしは今イヴなのだ、それも、トランス変身で剣ソードを使っている。
ゴムは剣が弱点だということは分かっている。

「おっと。負けたら終わりの鬼ごっこなんてやんねーよ！」

ルフィは、一目散に逃げ出す。

それを追いかける、さっきまで怯えていたRR軍レッドリボンの配下たち。

あたしは、純粹に気になった。
ルフィの強さを、勝負したい。
そして・・・。

「イヴは、イヴはどこに行った？」

あたしはまんまと逃げ出したのだった。

イヴと主へマスター（後書き）

と、いうわけで、主役はイヴとなります。

イヴの逃走

さあ、どうしようか。

逃げるのも大変そうだから、中で隠れて、帰ろうかって、思ったのに、見つかりそうなんだよね。

「あつ。ここにいた！」

案の上見つかった。

俺の足は早い。

いくら頑張っても追いつけはしないと思うけど・・・。

ただ、今は樽のなかで隠れてたんだよね。

「おいっ！早く出る！」

「やだっていったら？」

「生死問わず連れていく」

ズキユン

銃を打ってきた。

はあ。

俺の特性を知らねえやつは絶対にやるんだよねあ・・・。

ニユーーーーン

「効かーーーーん！」

相手の驚きよう、これは、悪魔の実を知らねえ顔だ。

「ゴムゴムのあ、ピストル~~~~っ」

吹っ飛んでったなあ、あいつ……。

で、どこまで飛んでったんだろ。

ま、どうでもいいか。

逃げておこう。

海賊もないんじゃない、これ以上いてもしょうがない。

ん？

ルフィはどこにいったんだろう？

あたしは確かに迷子になっていた。

こつちの世界に来てから、こんなたくさん的人是見たことがない。

「んあ？……」

なんか、変なおじさんがあたしのことを見つめてる。

でも、それは、右目を眼帯にかけた、シルクハットを被った男ではなく、たばこを吸ってるのは同じだが、いかにもお色気を求めてそうな顔に、ダーツのようにくるんと丸まった眉毛のおっさん。

ま、まさか。

「ねえねえ。君、いくつ？」

ほら来たサンジ！

でも、ルフィの居場所をさりげなく尋ねることくらいなら出来る。出来るだけ普通を装った。

「あたし、鬼なの」

やっぱこれ言わないとダメな気がする。

「鬼？友達とか？」

「ううん。知らない人」

「はあ？どういうことだ？家はどこだ？送ってやるよ」

賞金首なのに？

まあ、これは黙っておこう。

「うう、どこ？」

あ、サンジの顔がひきつった。

「とりあえず、どこか歩いてみて、場所が分かればいいんだな」

「分からなかったら？」

「俺にはどうしようもないね」

あの紳士のほうがどれだけよかったか。
まあ、あつちが合法的な仕事だけど、サンジは非合法的なやつだもんね。

ピピッ

「こつちか」

主が探している。

主の目には、相手の強さが分かる機械を埋め込んであると聞いた。
すぐにあたしの場所が分かってしまった。

「……主」

「マスター？」

「こいつめ、おら、貴様。ワシの大事な財産を――！」

「財産？こんなかわいい女の子が、お前の財産だと？」

「そうだ。そいつはワシの道具だ。だから、貴様に用はない！だから離せ」

数人の軍人がやってくる。

「へえ。私有軍かい。あんた、金持ちなんだね」

「違うな。これはワシの軍じゃない。我らは最強の軍隊、RR軍じゃ」

「……？」

ちんぷんかんぷんと言った様子だった。

当たり前。

見たこともないのだから。

「なんのことは分からないが、かわいい女の子を道具呼ばわりするのは聞き捨てならねえからな」

サンジは戦闘体制をとり、彼ら軍隊を一掃した。

あたしは目から、鱗が落ちたような気分だった。

こいつらは悪いやつらだ。

どうしてあたしは、こいつらの言うことをまともに聞いていたのだろっ？

「イヴ。やるんだ。こいつはお前と鬼ごっこをしたいらしいぞ」

あたしは嫌だと言う表情で精一杯反抗した。

「貴様には反抗することは出来んだ！さっさとやれ！やるんだ」

しかし体がかくかくと震える。

彼の声はこんなに威圧的だったのか。

あたしは、自然に耳を押さえる。

何も聞きたくない。

怖い。

彼の声が怖い。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。
嫌だ。

「無駄だ無駄だ。お前の体内のナノマシンはワシの言うことを素直に聞くよう出来ているんだ」

嫌。

嫌。

絶対に嫌ッ！！

しかし、そんなあたしの心とは裏腹に、あたしの右手は、しっかりと剣に変身トランスしていた。そして、

ザシュッ！！

腹を貫いた。

あたしは初めて、嫌な気持ちになった。
涙で頬が濡れたのだ。

ごめん。

ごめん・・・ね。

あたしは、主に連れられて、家に帰った。

あっ！！サンジ。

サンジが倒れていたのをルフィが見つけ出し、二人は海賊船に戻っていった。

イヴの逃走（後書き）

ワンピースのキャラクターたちに出会ったイヴでした。

イヴを救出

あの子を救いたい。

サンジからそう告げられたのは、しばらく後だ。

「RR軍なら聞いたことはあったけど、実際にそんなのがあるとは知らなかったわ」

「とにかく、あの子は、ただ無理矢理言うことを聞かされてるんだと思う。自由にならないとだめだ」

「当たり前だ。そうじゃないと、逃げただけじゃ海賊の名が腐る！」

ルフィはちからよく答えた。

こんなときになると、ルフィはとても頼もしくなる。

こんなやつが船長で本当によかった。

「貴様。ただの道具のくせに主に齒向かうとは！」

あたしは、主にたつぷりとお仕置きを食らわされた。

しかし、あたしの心は、もう変わらなかった。

あたしは言いなりにはならない。

だがしかし、彼が悪いやつだったら、いつまでもあたしは悪いままで使われる。

そんなのはあたしは望まない。
嫌に決まっている。
でも、どうしたら？

しかし、そんな心配は無用だった。

「ゲロさま！昼間のやつ仲間がやってきました！」

「な、なに！」

ルフィ？

ルフィのこと？

まさしくその通りだった。

ゾロの剣が壁を切り裂く。

ルフィのパンチが数人を吹っ飛ばす。

サンジが蹴りで向かってきたものを跳ね返す。

ナミが雷を起こす。

ウソップが銃を落とさせる。

ロビンが敵の関節を、訳の分からない方向に曲げている。

フランキーのメカ技の数々。

ブルックの骨技。

次々とRR軍が制圧される。

まさか、麦わら海賊団ってここまで強いのか？

これはすごい。

早くも、あたしのいる部屋までやって来た。

「おりゃああああっ！」

最初にやって来たのは、ルフィ。

次はサンジ。

その他、大勢がやって来た。

「おい！さつきはよくも俺の腹に穴開けてくれたなあ？」

でも、怒っているのは、あたしではなく、ゲロにだった。

「お前。その女の子を解放してやれ！さもないと痛い目にあうぜ？」

ルフィはすでに、対戦モード。

「……。やれるものならな……」

あれ？

このおじさんも戦闘体制？なんで？

「ゴムゴムのお！ピストルっ！！」

ズビュウウウン！

ゴムの拳が飛ぶ。

それは、ゲロの顔にまで突っ込もうとするが、腕にガシッと止められてしまう。

「んんっ……。あ、あれ……。ち、力が……」

驚くのは無理もない。

なぜなら、力が吸収されていくのだ。

「ふ、ふふふ。残念じゃった……。力がどんどん減ってしまうだろう？ 当たり前だ。ワシはロボットだ。しかも、パワーを吸収することができるのだ」

「うぐっ……。うがあっ……。っ。ぐぐっ……」

力が抜けていくことに、ルフィの腕が縮む。

「ルフィ。大丈夫か？」

「かつ……。かはっ……。ぐうっ……」

ついに腕が延びなくなってしまうている。

そして、ゲロが腹に蹴りをかました。

普通ならゴムの力で押し戻せるはずだが、全てのパワーを吸われた今、ゴムの体も全く延びず、ぶっ飛ばされた。

サンジも向かっていくが、ルフィの力をほぼ吸い取ったゲロに勝ち目はない。

それに、相手は体力無限。

永久に疲れないのだ。

彼は麦わら海賊団を次々と、追い詰めていった。

こ、これは・・・？

やばい状況？

あたしがいく番かな？

トランス
変身！

ビーム型の砲銃を構えた。

「なんだ？お前？ワシに歯向かう気か？」

ゲロはあたしにこう投げ掛けた。

あたしは、質問に答えない。

「それは無理だ。お前はワシの言う通りにしか動けない」

あたしは構わず、エネルギーを蓄える。

砲の先に、白い閃光が溢れる。

「左手をあげてみる」

無視。

無視。

いや、無視だつて！

あたしの思いとは真逆に、左手は真っ直ぐ上がった。

「ほら見る。お前はワシの言うことしか聞けん！」

白い閃光が鈍る。

あたしは、ゲロの言う通りにしか、

サンジにも、あんなことを・・・。

そのうち、ルフィや、他の仲間にも、危害を・・・。

「やめるな！」

サンジが叫ぶ。

その声は、まるで子供に言うことを正させるような、大きな声だった。

「自分の行動に自信を持って！誇りを持って生きろ！自由になれ！！
そんなおっさんの言いなりになぞ、ならなくていいっ！」

サ、サンジい・・・。

涙で前が見えない。

必死に拭いた。

何となく見えた、目の前には、

「ぶぐぐっ」

ゲロの口が押さえられている。
ハナハナの実の能力だ。

「今だ!!」

みんなが言った。

全員があたしに期待をしてくれている。

あたしは、生体兵器でも、誰かの財産でもない……。
名前は……。あとで考えよう!

ズギヤアアアアアアアアアアアアアアアン!!

イヴの旅

「みなさん、すみません。なんか、あたしまでご一緒させてもらっちゃって・・・」

「んなこたあねえよ。なにせ一緒に戦った仲間じゃねえか」

「そうよ。あなたは仲間よ」

「俺とはなかまじゃなくて、それ以上の親密な中に・・・あがあっ！」
ナミのパンチがみごとサンジに決まった。

みんなが笑っていた。あたしはそれにとても嬉しくなった。

「おお！そういや、お前、手がなんか変化してたよな？」

ルフィが変わったものでも見るかのように、あたしの手をじいつと見つめた。

「ああ・・・。あたし、実は、生体実験をされたんです。あの、わけのわからないじじいに」

「えっ・・・！？」

みんなの空気がいつきに冷えた。

だが、

「そうか。いろいろあったんだな・・・。よかつたら、喋ってくれないか？」

サンジがいつになく真面目な様子で聞いてきた。

まあ、あたしが会ったのは今日一日だけなんだけど・・・。

「あたしは、あのゲロってやつに実験されて、ナノマシンっていうのを注入されたんです。それを使うと、本来は、高い医療技術として使えるんですが、あたしにはそれを、戦闘目的で注入してきましたです」

「ナノマシンか。まあ、それなら可能だろね」

チョッパーが答えた。さすが船医なだけはある。

「そのおかげで、あたしは体を自由に変形させることができるようになったんです。たとえば・・・」

トランス
変身

指先を、ナイフとフォークに変換させる。
すると、みんなが、憧れの目で見えてきた。

「すっげー！なんじゃそりゃー！」

トランス
変身

次は両手に剣を作り、さらに口にも剣を作った。

「俺の真似かよ！」

ゾロが珍しく興味深そうに見つめた。

トランス
変身

「ゴムゴムのおー、ピストル」

腕をゴムに変化させて、パンチを試してみた。

「俺かー！おもしれえなー、お前！！」

ルフィはとても楽しそうに笑っていた。
あたしも思わず笑った。

「で？これから、どうすんの？」

ナミがあたしに聞く。

「うーん。世界中を見て回ろっかなあ？」

「へえー？世界旅行？楽しそうでいいじゃない！」

「へへ。やっぱりそう思います?」

「楽しそうだけど・・・。一人で?」

「ああ・・・。そういうことになりますかねえ・・・」

「一人でどこかに行ってもつまんない?」

ナミはそうあたしに、語りかけた。

ナミは一人で船旅をした経験がある。

きつと、そのときのことを思い出しているのだろう。

「大丈夫ですよ。仲間なら別にどこでも見つかりますし」

あたしは、少し強気で言った。

見つかるとうれしい。

ナミも笑顔になった。

「そう。でも、あたしたちは仲間なんだからね。そこんとこ、忘れないようにね!!」

「はいはーい!でも、あなたたち、海賊だもんなあ・・・」

「文句あるの?」

「ううん。全く!」

ナミはあたしを少しおちよくりながらも、はげましてくれた。

あたしは、一人じゃない。

みんながいてくれている。

そう思うと、とてもうれしく感じた。

「じゃあな〜イヴ〜!!」

「無理しないでよ〜」

みんなが見送るなか、あたしは旅を始めた。

自由なあたしは最高にうれしい気分だった。

はじめにやってきたのは、何やら小さな村。

サーチイ村というこの村は、小さいながらも、なかなかの活気がある村だった。

宿屋があつたので、そこに泊まることにした。

あたしの体は思ったより疲れていたらしく、そのあと、ぐっすりと寝てしまい、食事もとらなかった。

次の日。

起きたのは六時ほど。

お腹が減ったからだ。

食事をとったのはよかったけど、あまりの食いつぶりに宿屋の人が驚いてたからね。

あまり食べ過ぎには注意しよう。 うん。

そのときだった。

「きゃ~~~~っ！！泥棒よ~~~~っ！！」

女性の声。

泥棒？

あたしは外に飛び出した。

見ると、店のものを奪って逃げたようだ。

見るからに悪そうな声をしている。

全く、くだらない騒ぎを起こしてくれるもんよ。

でも、飛び出したのは仕方がない。

いっちょ、倒してちょうだいいたしますよ。

トランス
変身！！
ビストル
銃

びゅんっ

泥棒の前、いわば進行方向になる場所に、一発撃ちつけた。

「泥棒さ〜ん！もうやめなよ〜。それ以上動かないほうが得よ?。」

あたしは出来るだけ、やさしく、やさしく言った。

「へっ！なにが得だ！お前みたいなガキにんなこたあ言われたくないね!。」

泥棒は言うことを聞こうとしない・・・。

全く、言うことは素直に聞かないとダメだよ〜。

トランス
変身！

ロープ
縄

あたしは自分で作った縄で、泥棒を縛った。

警察に明け渡したら、お礼にと10万イエンもくれた。

大したことはしなかったのだが、良いことをするのは気持ちいいね。

イヴの旅（後書き）

さて、ここで疑問が・・・。

1 イエソって何ベリーなんでしょっね？

イヴの戦闘

夜にサーチイ村から出ていき、違う場所に向かい始めた。
しかし、やって来たのは、薄気味悪い森。

どうやら、この森が一番の近道らしいのだが、

「こ、こわ・・・」

時々聞こえる、カラスの鳴き声が、あたしを震え上がらせる。
しかし、さつきから、何度も聞こえるうなり声、これは何？

ウオオオオオオオン

狼のようなこの鳴き声が、あたしの耳の鼓膜に入る。
すると、

グアオオオオオウ

出会ってしまった。

一匹の狼。

犬の三倍はあるだろう、その巨体に、赤色の毛が靡いていた。

その狼は、完全に戦闘体制を取っていて、戦いは避けられない感じだ。

「もっつ。めんどくさい」

トランス
変身！！

ネイル
爪！！

あたしが戦闘体制に入っただのが分かったのか、向こうは襲いかかってきた。

噛み砕こうと牙を向くが、それをあたしはひらりとかわす。

そして、あたしは爪で切り裂く。

しかし、それもかわされ、一歩引いた。

アオオオオオン！！

大声で叫んだ狼は、攻撃してこない。

ずっとにらみ、こちらの様子をうかがっているようだった。

あたしは、戦意を失ったのだと勘違いし、変身をやめてしまった。
すると、

ザサッ

10匹ほどの狼が、やって来た。

仲間を呼ぶための合図だったのだろう。

あたしは素直に後悔した。

「ちっ！！」

トランス
変身
ソード
剣！！

向かってきたやつから、真っ先に切りつけた。
しかし、いくらやっても、うまくかわされる。
もうダメだ。

あたしは、完全にピンチに襲われている。

ザクウツ

腕に見事に引つ掛かれてた。

「ああっ!!」

その瞬間に、^{トランス}変身が消えてしまった。

腕からの痛みは、あたしを思うより痛手になった。

あたしは徐々に追い詰められていく。

しかし、あたしの体内にはナノマシンが入っているのだ。

傷は少しずつ確実に癒えていった。

細胞分裂を速成させていく。

ギャオオオオツ

狼はあたしを噛み砕こうと、いつきに襲いかかって・・・。

はぁ・・・。

あたし、もう終わり？

早かったなあ、転生物語。

できたら、次はちゃんとした生活を送りたいなあ。

月がきれいね。

今夜は満月。

そりゃ狼も出るわよね・・・。

その後、あたしは気絶してしまったようだ。

ただ、周りが、台風でも来たかのように大荒れしていた。
そして、狼は全員がノビていた。

「あ、あたし・・・助かったの・・・？」

しかし、何があたしを助けてくれたのだろうか？
今は何も分からない。

いずれ分かったらそれでいい。

傷も回復してきたようだ。

ナノマシンに消毒作用も働きかけてもらっているため、今はなんとか無事のようなのだ。

痛いのは嫌だもんね。

夜があけるまで、あたしは眠っていた。

できる限り、気配を消して、そのうえに隠れながら寝たので、なんとか猛獣にも襲われずに済んだ。

夜があけたのと同時に、あたしは動き始めた。

ここからできるだけ早く逃げよう。

怖いから・・・。

トランス
変身
ウィング
翼

背中には大きな天使の翼がはえて、あたしに空を飛ばさせる。

結構この森は大きかった。

何とか逃げたあたしは、港町にたどり着いた。

イヴの戦闘（後書き）

すみません。

あまり戦闘シーンをかけませんでした。

次は頑張ります。

いつになるかは分からないけど。

イヴと道へタオ》（前書き）

今回はオリジナルキャラクターを出したいと思います。

イヴと道へタオ

あたしは、港町にやって来ました。

でも、この町でも、なにやら怪しい雰囲気漂っている。

「氣」も「氣」も全く感じられないあたしには、何とも説明できないのだが、何やら、嫌な雰囲気。

事件が起こる前に、なんとかこの町を出たいのに、お腹はどうしても空いてしまう。

人間って辛いね。

近くのレストランに入ったのだが、人がいない・・・。

「すみませ〜ん」

・・・。

「ごめんくださ〜い」

・・・。

ガン無視。

本当に誰もいないようだ。

でも、店事態は開いていた。

漫画なら、はてなが飛び交っている。

「何でいないんだろ・・・？」

適当にぼやいては見たものの、全く意味が分からない。

? ? ? ? ?

いくら考えても分からない。

仕方ない。

宿屋がなんかで、少し寝れば分かる。

よね……。

と、思ったら、目の前に宿屋があった。

しかし、人の気配が全くしない。

この町全体を見渡しても、人影や気配を感じることはなかった。

「何なの？この町・・・町全体が凍ったように静かね・・・」

不気味すぎるではないか。

静かほど怖いものはない。

臆病なあたしは、早々と立ち去ろうとしたが、

ズズズズズズズズズ

地面が揺れ始める。

大きく震動が起きたが、これは、普通の揺れじゃないことに気がついた。

「氣・・・？」

さっきまで、全くと言ってほど感じていなかった、ピリピリとした力を感じ取った。

これが氣というものなのだろうか？

「はああああああああああああつ！！！」

ズシャアアア！！

あたしの後方から、何やら激しい音が聞こえてくる。

あたしはそれを察知し、右にかわす。

それは、完全に世の中の法則を破ったもの。

何と水が、球体に変化していて、あたしがさっきいた場所まで向かっているのだ。

こんなバカな、と言うか、完全に何でもありなことができるもの・
・あたしは一つ、覚えがあった。

「道^{たお}・・・？」

あたしがそう呟いたときだった。

「そうさあ！よくかわしたなあ、お嬢ちゃんよお！！」

出てきたのは、大きな男だった。

身長2mはありそうな大きな巨体は、とてつもなく悪人そうな表情をしていた。

「あなた、本当に道使い《たおつかい》なの？」

あたしは、変身^{トランス}もせずに尋ねてみた。

すると、彼は、

「その通りさ。俺は水に氣を入れることで、水を思うように操れるんだ」

水を使える。

つまり、さっきの万有引力を見事に逆らっていたあの水は、彼の出したものだったようだ。

「この町の人は？どうしていないの？」

「教えてほしいか？」

あたしは無言で頷く。

しかし、今までの小説や漫画から見た、推測上ではこのあとという台詞は・・・

（「この俺を倒すことが出来たらな！！」）

あたしが心の中で叫んだ言葉を、男は分かってたかのように口にした。

あたしはそのかぶり具合に笑ってしまった。

「うおりゃあああつ」

彼の手から、さきほど一緒のような球体の水が作り出された。

ズアアアアツ

水は勢いよくあたしに向かって投げられた。

巨体の彼の腕力で投げたため、かなりの高速な球となった。

トランス
変身
バランス
傘！

どうにかして、水を跳ね返さないと、という思いで、傘を出した。

「ふへへへ。無駄だ無駄だ！！その水は、三倍圧縮した水だぜ。普通の三倍の水圧が貴様にはかかってんだよ。たかだか女の子に耐えられるかよ！？」

彼の言ったことは正解だった。

あたしは、水の力におし負け、後ろの壁に体を打ちつけた。

「い、いったあ」

あたしは変身^{トランス}をやめ、痛みに耐えようとした。

あの水を何とかしなくちゃ。

「さてえ、俺は可愛い女の子がもがき苦しむ姿を見るのが大好きなんだよなあ。お前、意外と可愛いよなあ！？」

下品な表情であたしをじっと見る。

あたしをそんな目で見るな！

気持ち悪いっ！

あたしは自分の手で持つ形の剣を作り出した。
さすがに手を剣にするのはグロい気がする。

「ほお……。変わった手品だなあ」

「それはどうも」

あたしは剣を振りかざし、まっすぐ切りつけた。

しかし、男は水を出して、その勢いで後ろに下がっていたのだ。

「へへっ。水はこんなことにだって使えるんだよ！」

水を一瞬にして氷に変換させた。

アイスレイン（氷の雨）

ズアアアアアッ

氷柱上になった氷があたしに向かって降り注ぐ。

「やっばっ！」

あんなもの、当たった瞬間に血だらけだ。

蜂の巣にはなりたくない。

キン

キン

キン

キン

キン……

空から降るものを、あたしは必死に剣を使い、かわしているが、キリがない。

いくらやっても、ずっと降ってくる。

ブスッ

「うう・・・っ」

ゆ、油断した。

右手の手の甲に、つららが刺さった。

とがっているつららでは、たかだか氷でも、刃物に変わる。

そして、あたしが油断したときだった。

ブスブスブスブス

あたしの頭や肩に、つららが刺さった。

「痛あ~~~~~~~~っ!!!!!!」

血が滲み、全身に冷たい感覚と痛い感覚が混じりあい、あたしは大声をあげてしまった。

あたしは、何とか氷柱を抜く。

しかし、痛みで戦える状態じゃない。

「ぐうつ」

屈辱的だが、逃げるしかない。

あたしは、天使の翼を出そうとしたが、

「い、痛い」

天使の翼を出せるほどの力もなくなっていた。

ということに気がついた。

仕方がない。

もう少し負担をかけない変身トランスを……。

いや、それなら、歩いていけばいい。

でも、それなら、何か目を眩ませて相手に隙を作らないといけない。

「これで、終わりにしてやる!!」

彼は両手で巨大な水を作り出した。

「この水はなあ、約50倍の圧力をかけてある当たったら、その瞬間、ペチャンコになるぜ」

水の大きさからして、10Lは軽くあるはずだ。

あんな大きな水、当たるだけでも痛いのに、50倍!?

かわす手だてが見つからない。

また、人生の終わりを見た。

だが、今回は負けるわけにはいかない。

あのとき、狼のときには何があったか覚えてないが、今、くたばるのは、嫌ッ!

水を返すには、衝撃的なものを出すしかない。

今までの漫画、小説。

その中で、衝撃波的な技はあったか……?

必死で探す。

どれか?どれか?どれか?

あっ!!思いついた、が、出来るかどうかは別問題。

出来るかなあ?

でも、思いついたのはこれしかない。

手を付け根であわせ、上下に広げた。
そして、体の後ろにやる。

手に力を集中させて、技名を言う。

「か~~~~~!」

手に少しずつ光が集まってきた。

「め~~~~~!」

「は~~~~~!」

「め~~~~~!」

すると、男は、

「そんなちなけな技でこれと対抗する気か? いいぜ、こいよ。おり
やああああああ!!」

男が大きな水の塊を放り投げてきた。

打ち返せるだろうか?

不安は抱きつつ、最後の技を繰り出した。

「波あ~~~~~っ!」

イヴ版かめはめ波!!

かめはめ波の閃光と水が合わさり、爆発を起こした。

ズギアアアアア

今だ！

逃げるチャンス！

あたしは、爆発の煙に紛れて、逃げていった。

イヴと道へタオ》（後書き）

あの男の能力の詳細

道：W A T E R

外氣攻型

水や水分や水蒸気に氣を混ぜることで、水を自由に操れる。

また、水の分子の結び付きを変えさせて、物質変化（湯気や氷に変えること）をさせることができる。

イヴと屋敷

「はあ．．．、はあ．．．、はあ．．．」

あたしは息を切らしながら、一つの洋館らしき場所に入った。

ここは、町から少し離れ、森の中にひっそりと建つ洋館。

どうしてこんな隠れるように家が建てられてるのだろう。

そんなことを思いながらも、隠れる場所と言ったら、もうここしか残されていない。

しかし、ここが何なのか、知りはない。

人がいたら、その人に手当てをしてもらいたい。

「す、すみま．．．せえん．．．だ、誰か．．．いらっしやいませんか．．．？少し、怪我をしましてえ．．．外にいる．．．道使いにやられてしまったんですよ．．．」

54

あたしは、今、出せる、最大限の声を出して言った。

すると、一つの扉から、お年寄りがやって来たのです。

「ほう．．．お主も我らと同じか。なら、入りなさい。我らは同志なら、大歓迎するぞ」

おじいさんにはにつこり笑ってくれた。

「はい．．．か．．．ん．．．しゃ．．．し．．．ま．．．貧血を起こして倒れてしまった。」

「ん．．．？」

あたしが起きると、ベッドで寝ていた。
あたしが起きたことを気がついた人物が、少しずつ現れ、長老を呼びに行った。

「やっと起きたかね？お嬢さんや」

さきほど、あたしを始めに見つけてくれた、おじいさんがあたしに声をかけてくれた。

「あなたの怪我は相当ひどかった。もし、もう少し遅かったら、命の危機だったわい」

よく見ると、あたしの頭や肩には、包帯が巻かれていた。

しかし、すでに痛みを感じることはなくなっていた。

「にしても、七日も寝ておるとは、よほど大変だったのか？」
いや、違う。

ナノマシンの効果により、治療に専念し、ずっと寝ていただけ。
あたしの体はすでに治っていた。

「それ。女性の方々、彼女の包帯を変えて差し上げてやりなさい」

男性は、違う部屋に連れていき、あたしは包帯を解かれていった。
そのとき、彼女たちの目は、驚きに変わった。

「あれ？傷は・・・？」

彼女たちが驚いたのも無理はない。

あたしのナノマシンを大量に使ったおかげで、あたしは傷を完治させた。

人間以上の治癒能力で。

「あ、あんた・・・す、すごい怪我・・・してたんじゃないの？」

その目は、妙な化け物を見るような目になっていた。

「・・・・・・・・」

あたしは答えなかった。

たとえ事実を述べたって、きっと彼女たちの目は変えないだろう。どうせあたしは人間じゃない。

手が武器に変わる、おぞましい魔物。

男性らが戻ってくると、長老たちの耳にさきほどのことが伝えられた。

しかし、長老たちはあたしにそれ以上、問いただしはしなかった。と、言うより、距離を置かれたのだ。

魔物に対しての対抗策、触らぬ神にたたりなし。

そんな言葉が昔からあるのだ。

あたしとの壁は、いつの間にかすごく大きくなっていった。

それを、さらにあたしの心をきつく突き落としていった。

あたしは孤独だ。

今まで、一人で生きていた。

それを寂しく思ったことはない。

でも、今日は違っていた。

あたしの心が、あの、道使いのつららの刃より、もっと鋭く、もっと冷たい、「目」で裂かれたのだ。

体の傷は、ナノマシンで急速に治る。

しかし、心の傷は、ナノマシンでも癒せない。
ナノマシンは究極の機械だとある化学者は言ったらしい。
だったら、今の状況も治してよ……。

「うぐっ……ひっ……うっ……」

あたしは泣いていた。

目からは溢れるほど大粒の涙が、頬を伝い、体育座りをしているあたしの膝に、流れ落ちた。

あたしは、膝をぎゅっと抱き締め、堪えて堪えて、泣いていた。

「どうちてあの娘ないてりゆの？」

「見ちゃダメよ。あの娘は人じゃないわ」

そんな会話が聞こえた。

あたしはその声のした方へ、怒りを露にした目をやった。
すると、

「うわっ、こわっ」

「殺される」

「こっちみんなー！」

嫌な言葉で罵声を浴びせてくる。

あたしは、膝に顔を埋め。

何も聞かない。

何も言わない。

無音で泣いていた。

その夜。

何とかあたしを匿ってはくれたが、与えられた寝場所は、一番奥の

場所だった。

「ここで勘弁してやるよ」

「このやつに手え出したら、すぐに追い出してやる」

そんな言葉をかわされながらも、あたしは寝た。

イヴと屋敷（後書き）

イヴの暗いストーリーです。

本来、通常のブラックキャットでも、こんなシーンがあってもおかしくないはずです。

しかし、イヴの力は、人を助けるために、大活躍するのです。

人間はたとえ、自分の味方でも、自分と違うものだと、おかしい目で見てしまうこともあるでしょう。人間とは、面倒な生き物ではありません。

しかし、その見方を変えるだけで、少しは、人間の良さも垣間見れます。

イヴの再挑戦

次の日。

あたしは初めて、トモダチができた。

それは、あたしと同年代の少年で、レジンという名前だ。

あたしの能力のことを、すごい力だと言ってくれた。

「でも、この人は、化け物って・・・」

「君のすごさを知らないからさ。君、あの水のやつと戦ったんでしょ？すごいじゃん。君の強さを見せてあげたら、人も変わるって！」

彼はそう言ってくれた。

なんて優しいんだろう。

あたしはまた、涙を流した。

「こらこら！強い娘が、そんなすぐに泣いたらダメだよ。そろそろ出発して、あいつを倒してきてよ！」

彼は、そんな言葉で、あたしを奮い立たせようとした。

「でも・・・あたし、強くないし・・・」

「君、自分の力を信じてないの？」

彼は、小さな木の板をあたしの前に持ってきて、

「これを、特別な力なしで叩き割ってみてよ」

何を言っているの？

あたしは、変身^{トランス}以外は普通の女の子だ。

パワーはそんなにあるわけない。

あたしはやる気なしに、右手の拳で、板にパンチをしてみた。
すると・・・

バキイイイイッ

木は真つ二つに割れていたのだ。
あたしも、自分の力に驚いた。

「な！？君にはすごい力があるって、僕は思うよ？」

彼は、いい表情で見ている。

彼みたいな人間ばかりなら、世の中も良くなるであろう。

「うん。ありがとう。明日、行くよ。今日は眠たいから、明日にね」
「うん。お休み」

数秒たって、彼の気配が消えた。

あたしに、気を使ってくれているのだろう。

彼にあたしは少なからず、好意を抱いた。

あたしは、また、港に向かった。

もちろん、あの男を倒すためにだ。

「ほお・・・またやって来るとは、バカとしか言いようがないなあ
！」

「バカで結構よ！」

あたしは翼の変身をやめ、普通に戻った。

「だったら、また、あの技で消えるんだなあ！！」

再び、約50倍圧縮の球体の水を作り上げた。

あたしは、あの技に対抗する術を、すでに手にしているのだ。

あのとときより、あたしは強い。
なぜだか、確信がある。

どこからくる自信かは分からないけど、あたしは、絶対に、あのと
きより強い。

「ペチャンコになっちまいなあ!!」

水が勢いよく飛んでくる。

でも、負けない。

あたしは、あのとときより、もっと・・・もっと・・・。

「かめはめ波っ!!」

あたしは、前に打ったかめはめ波を短縮して打ち放った。

あたしの放った閃光は前と同様に、水と当たって爆発を起こす。

それを利用し、死角に回り込み、

トランス
変身!!
ソード
剣!!

剣を彼の心臓に向かって突き刺そうとするが、

スカッ

かわされる。

「危ねえな。お嬢ちゃん。あんたみてえな女の子が、そんなもん、
振り回したらダメだぜ?」

小さなつららをあたしに投げつける。

あたしはそれを剣で払い、再び剣を振り上げ、突進する。

「そうか。だったら、大ダメージを与えた、あの技でてめえを今度
は、蜂の巣にしてやるよ！」

彼は大量の水をいつきにつららに変えた。
そして、

アイスレイン！！

再び、しかし、前回と違うのは、横からの攻撃だということだ。

また、前回と一緒に。

「前と同じ技でやられるほど、あたしもバカじゃないの！」

トランス
変身
シールド
盾

キキキキキキキキキキ

つららは全て盾に弾かれて、地面に落ちた。

「よしっ。これで・・・」

「あまいッ！！」

つららは再び、ぴくぴくと生き物のように動き始めた。
そして、

「くたばれ！！」

再び動いたつららは、あたしを囲うようにして、

まるで魔空包囲弾のようにあたしの全身をつきさそうとした。

こ、これは・・・。

まずい

まずい

まずい

まずい

まずい

まずい

まずい

まずい

まずいッ！！

「はぁあっ！！！！」

すると、突然あたしの体から、何か、オーラのものが噴出した。

しばらくは様子が分からない間でいたが、やがて頭が回転し始め、
ようやく、今の状態が理解できた。

あたしの全身を青白い炎というか、何か説明しにくい、オーラ状の
ものが出ている。

気？いや、氣？

どっちなんだろう？

でも、あたしは道は習^{たお}っていない。

だから、気なのだろう。

イヴなのに、ドラゴンボールのようなことになってるけど、いいのかなあ？

「ちくしょう。あれを打ち返すとは」

「・・・・・・・・」

「へえ！お前、相当なマジになってるようだなあ！！だったら、俺の最後の技でとどめを指してやる！！」

彼の手からは今までの比べ物にならないくらいの大量の水が出る。

「はあああああああああああ」

彼の水は洗濯機のように回転を始め、渦潮のようになった。

「必殺、スーパーターン超回転渦潮！！」

渦潮をあたしに向かって投げつける。

渦潮はあたしに真っ直ぐ向かってくるが、それほど恐ろしいもののような感じがしない。

ふうん……。

この程度ですか……。

あたしは左手を、おもむろに、渦潮に向かってつきだした。

「はっ！！」

手からは、白い光の弾が飛び出たのだ。

ズシュユユン…………

なんとそれは二つの渦巻きをなかったものとし、真っ直ぐ、男の体に向かつていった。

ズガアアアアッ

男の体は軽く遠くに吹っ飛んだ。

それをあたしは、

「ちよいまち！」

カウボーイのような、縄で彼を縛り、二度とこんなことをしないよう、言葉による説得をした。

まあ・・・、言葉の背景には、さまざまな暴力がのたうち回ってたけどね・・・。

「はあ。お嬢さん、感謝するぞい」

長老が早くもやって来てくれて、あたしのことを褒め称えてくれた。

「ごめんなさいね。あなた、とても人間のじゃないように見えて、とても怖かったの・・・」

女の人が最初に謝罪してくれたのを始め、いろんな人が、ごめんとか、悪かったなど、謝ってくれた。

「いや。いいですよ、別に。全く気にしてません」

まあ、嘘だけどね。

大泣きしたけどね。

「ねえ。この村の、レジンって子は、どこの家の子ですか？」

あたしは大したことは言っていないつもりだったのに。

「あ、あなた・・・、レジンを見たの・・・？」

「ぎゃあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ!!」

あたしは大きな悲鳴をあげた。

その後は、怖くて・・・言えないっ。

ただ、一つ言えるのは、あたしが見たのか・・・生き物じゃないと
いうことだけだ・・・。

イヴの再挑戦（後書き）

もう、このイヴは、ブラックキャットとは、別物と考えてください。

イヴと孫

あたしが現在いるのは、この世界でベスト4にも入るような、超巨大都市。名は

西の都！！！！

「ウエストポリス」または、ふつうに「にしのみやこ」と呼ばれる場所だ。

まあ、言うなれば、カプセルコーポレーションの社長一家が住む都会だ。

あたしは今まで、この世界の都会を見たことがない。
やっぱりエアカーとかブンブン飛んでいるのかな？
あたしは楽しみで、走り出したのだった。

エアカーの量・・・すごっ！！
ビュンビュンなんてものじゃない。
本当に。

さすがカプセルコーポレーション。
世界が誇る最強の会社がある都市。
人の多さも半端なかった。

でも、あまり、キョロキョロするのもどうかと思い、あたしは必死に堪えた。

抑えがたい衝動を何とか堪えて、無事にホテルを見つけた。
でも、そろそろお金もつきるころだ。

あまり大量の出費は避けたい。

スライパーライセンス

あたしは掃除屋免許を持っていない。

だから、大した情報提供をしてもらえない。

だから、あたしみたいな人間は、普通の手配書を使い、探さなくてはいけない。

もつといい情報がほしいのだ。

お金のために・・・！

しばらくして、掲示板のようなものを見つけた。
そこには、数十人の手配書がある。

モンキー・D・ルフィ

その中にこの手配書が書かれていたのだ。

もう、完全な悪党と化していた。

ちなみに、賞金は、5000万ゼニーと書かれていた。

やっぱり地域によってお金の単位は違うようだ。

あたしと会ったときは、正義のヒーローだったのに・・・。
今でもそうであることを祈ります。

さて、あたしは適当に町を探索することにした。
何かおもしろい掘り出し物とか見つかるかも！
と思った途端に、

「へえー！西の都ってでっかいんだなあー」

オレンジ色に「亀」と書かれた服！

あれはまさしく、亀仙流の使い手？

って言うか、孫悟空？

背中につけた棒。

あれは正真正銘の如意棒に間違いあるまい。

自分の好きな長さに変えられる棒。

あれは、かつて武道家の中でもよく知られた人物、孫悟飯のものだ。

あたしだってドラゴンボールを読んでるからね。

多少は知ってる。

あたしは何食わぬ顔のつもりで彼を見ていたが、
内心大騒ぎ。

このあと、あのあたしよりも背が小さい少年が、あたしの前住んで
た、RR軍を倒し、大魔王や、宇宙の帝王、かつてのRR軍レッドリボンの生き
残りが作った人造人間たちや、魔神を倒すのだ。

そう思うと、とてもすごい。

でも、まだまだ、今は子供だ。

あたしよりも弱いかも知れない。

「なあ！！！」

「ふへっ！？」

あたしが何やら勝手に考え事をしてると、彼のほうで喋りかけてき
た。

あたしは思わずその状態に声をあげてしまった。
はずかしっ！！

「なあ、お前、ブルマン家知らねえか？」

「ブ、ブルマ？」

「やっぱお前も知らねえのかぁ・・・」

彼は見た感じ、トボトボと言う様子であたしを通り去った。
本当は知ってないはずがないんだけど、仕方がないことなのだ。
だってあたしは、ブルマとは接点がない。
知ってる方がおかしい。

あたしは少しかわいそうな目で、悟空を見送った。

「おらおら！そこどけ！」

すると、あたしの知らない場所で、最悪な事態が起きていた。
窃盗事件が起きたらしい。

すると、その犯人があたしのほうにやって来て、

「いいところにいたなあ、嬢ちゃん。ちょっと面貸せよー！」

「ちょ・・・ちょ・・・髪の毛、引つ張らないで・・・」

あたしの髪の毛をつかみ取り、無理矢理に自分に近づけさせた。

「動くなあ！！動いたらこいつの命はねえぞー！！」

あたしに向かってナイフを近づけた。

そのナイフは、果物を切るためだとか、そんな生易しい武器などではなく、どちらかといえば、小型のサーベルのように、おぞましい形をした、れっきとした、凶器だった。

「言っとくけどなあ。無駄なことをするなよ。俺はな、元医者なんだよ。頸動脈の場所はしつかり分かってるし、他にも人の急所なら色々知ってるからな。バカなことした瞬間、こいつの命はないと思えよっ！」

「・・・いつっ・・・」

あたしの頬に刃が突き刺さるのが分かる。

血が少し出て、痛いのが分かる。

いつもなら、ナノマシンでいつきに回復させるが、今回、そんなことはしないほうがいいだろう。

「なにやってんだろ。」

あつ！！さっきのやつが捕まってる！！」

悟空があたしに気がついたのか、あたしの方にやって来る、

「おいっ！お前！！」

悟空が、窃盗犯を指差す。

「そいつが、何か悪いことしたか？」

あたしをかばってくれるらしい。

やっぱ主人公はやさし〜。

「こ、この人は、窃盗犯。泥棒よ・・・あたし、悪いことしてないのに・・・。君、あたしを助けて！」

頬を突く痛みに耐えながら、あたしは言った。

すると、制止させるかのごとく、さらに頬に深く、刃を突き立てる。

「そっか。お前が悪いんだな！オラ、悪いやつは許さないぞ！」

悟空は戦闘体制に入った。

「おいおい。やめておけ！そんなことをしたら、こいつが死ぬんだぞ？」

あたしを指して男は言った。

「ちくしょ〜。きたね〜の！」

悟空もさすがに命に関わることは嫌なようだ。

しかし、あたしにとっては今の状態はどちらも危険だった。

「君。あたしのことは良いから。こいつ、倒しちゃって・・・」

あたしは指を動かし、男を指差す。

「そっか〜。だったら、まあいつか。いくぞ！」

マジですか。

普通そう言われても手は出さないものよ？

手え出そうとしてるよ、この人！

だったら仕方ない。

あたしも自分の力を使うしかない。

「のびる棒！」

如意棒が伸びる。

しかし、棒が伸びる前に、

「はい！こいつは終わり！」

あたしの首を掻き切った。

つもりらしい。

トランス
変身

スチーム
鉄！

首を鉄に変え、切られるのをふせいだ。

これには男も驚いたらしいが、そのあと、すぐに如意棒が追い付き、彼を取り押さえた。

「ありがとう」

「お前、首切られてたけど、大丈夫だったか？」

「まあね、あたし、あんな程度じゃやられはしないわよ！」

「へえ」。変わったやつ」

悟空と少しの間、お喋りをした。

「そうだ！あなたの探してる、ブルマさん。あたしも探すのを手伝ってあげるわ！」

「え！？本当か？」

「ええ。あたしもあなたに、恩返ししたいもの」

次回に続く！！

イヴとイヴ

「あれれ？孫くん!!」

ようやく、カプセルコーポレーションにたどり着いた。
警官がずっとジロジロ見ている。

あたしたちが大企業のご令嬢の知り合いじゃだめなの？

「本当に友達だったんだね。じゃ、さようなら!」

警察官はそのまま立ち去り、三人だけとなった。

「ねえねえ孫くん。そっちの子は？」

ブルマはあたしの方を指差し、そう聞いた。

「あたし・・・イヴって言います」

「へえ。イヴちゃんね」

悟空は、さつきから、全自動のさまざまなロボットを変な物扱いばかりしている。

「ねえ、孫くん。あなたまだドラゴンボール探ししてるの？」

「ああ。いろいろ面倒なんだ」

「ねえねえ、ドラゴンボールって何？」

あたしは出来るだけ知らない風を装い尋ねた。

悟空は丁寧に説明してくれたけど、あたしは本来は知っているので、まあまあ、省略する。

「そーいや。明日は学校休みね……。孫くん、私もついていってあげよっか？」

ブルマ・・上から目線すぎでしょ。

「えー。お前がか？足手まといだよ」

悟空すごいまともなこと言ってるよ。

「悟空くん。作った人の言うことなんだから。間違いはないと思うわよ？だから、連れてってあげたら？」

あたしは一応ブルマの方に話を合わせた。

悟空は不服そうながらも、ブルマを連れていくみたいだ。

「で、お前は？」

と、悟空は聞いてきたのだが、あたしの答えは決まっていた。

「あたしは、別の場所に行く用事があるから。じゃあね！」

「うん。バイバイ！」

悟空は、筋斗雲を呼び、ものすごい高速で立ち去って行った。

本当はあたしも行ってもよかったのだが、他の町にも行ってみたいという願望がある。

あたしはあたしの自由気ままな野良猫？生活を送りたいのだから。

しばらく空を飛んでいたが、続いての町についた。

この町は、何やらドラゴンボールに出てきそうな古風とハイテクが入り交じったような町でも、ワンピースに出てきそうな昔っぽい感じの町でもなかった。

人々は絶え間なく行き来するが、人々はまるで都会の人間のように忙しく動いている。

家は主に煉瓦や鉄骨のようなもので作られているものばかりで、見るからには、超近代的な町並みだ。

ここでの指名手配の掲示を探したら、そこのお金の単位に、この町の本当の姿が分かった。

モンキー・D・ルフィ

7000万イエン

単位はイエン。

ついにイヴの本来の居場所、ブラックキャットに舞い戻った。

西の都とはまたひと味違った町並みだ。

さて、この町に来たはいいが、あまり大したイベントはなさそうだ。あたしがいつも行く場所に限って事件が起きるのは、やはり「少年漫画の主演あるある」なのか？

そんな下らない考えはさておき、やはり、事件はこの町でも起きるのだ。

ドガガガガガガガガガガガガガガガ

遠くの場所から、銃を撃つ音が聞こえた。

どう考えたって普通な状況ではないから、あたしはその場所に行ってみることにした。

そこはこの町でも結構大きめの銀行。

中では、三人の男性が、マシンガンをぶっ放って、人々を脅している。

これはもしかして、銀行強盗と言うやつじゃないの!?

あたしは待つというのが嫌いな性分だ。

トランス
変身
ウィング
翼

フェザーブレード
羽根の弾丸!!

天使の翼の羽根一枚ずつが弾丸に変化する。

それがマシンガンを撃っている一人一人に命中した。

トランス
変身
ロープ
縄

あたしは腕を縄に変化させ、やつらを取り押さえようとした。
その瞬間だった。

ドンッ

ドンッ

ドンッ

ドンッ

ドンッ

五発同時に撃たれた弾丸が、三人の手の平と、隠れていた二人に命中した。

(ま、まだ二人隠れてたの!?)

それに、驚いたのはもう一つ理由があった。
五発同時の超早打ちの銃使い。

これはもう、一人しかないいでしょ。

「よっしゃあ！ナイス！！」

その方向には、

不吉を表すサーティーンの刺青。

真っ黒な装飾銃、ハーデイス。

そこにはトレインの姿があつたのだ。

「よし。よく敵の注意を引き付けてくれたなあ。おかげでやりやすかったぜ」

トレインはあたしに向かってブイサインをしてきた。

あたしはトレインに、囷として扱われたのだろうか？

「にしても姫っち……。お前、スヴェンと一緒に向こうに行ったんじゃないかったっけ？」

ん？どういうこと？

『おお、トレイン。今そつちで銃弾の音が聞こえたからよ。今向かってんだが、大丈夫だったか？』

「ああ。大丈夫だ。でもまあ、なんで姫っちはこつち来てんだ？」

『はあ？お前寝ぼけっちまってるのか？イヴなら今俺と一緒にいるぞ』

「えっ・・・こっちにもいるぞ？」

『は？どういうことだよ。意味分らないぞ！そっち行く！今行くからそこ待ってる！！』

どうやらトレインは、スヴェンと共にあたしの話をしていたらしい。しまいにはあたしのことをジロジロジロと観察し始めたのだ。

「どっからどう見ても、イヴだよな？」

少しうつとおしかったので、髪の毛で張り手を一発かましておいた。だが、すぐに復活し、あたしをまだジロジロとみる。全くどうしてこう、懲りないのかなあ？

「おい！トレイン！！」

スヴェンたちが到着したようだ。トレインに駆け寄ってくる。

「全く。イヴはちゃんと俺といたのに。全く・・・ぬおっ！！」

あたしを見て、素直に驚いた様子だった。

「な、なな・・・、イヴが、二人・・・？」

スヴェンの隣には、ちゃんと、イヴがいた。
あたしのことを驚いたような目線で見ているが、あまり表情を示していない、全くのポーカーフェイスだ。

あたしと全然違う。

「すげー！！姫っち分身も出来るのか」

トレインは驚いているようだ。

「あの子は私じゃないわよ」

イヴは、トレインにそう伝えたと、トレインはなぬっ！？といった様子であたしと彼女を比べ始めた。

恐らく、イヴも驚いてくはないのだろう。

しかし、物事を慎重に考えているところは、あたしと違う、彼女の姿だろう。

「ど、どうしようか・・・」

とまどう三人。いや、四人。辺りから見たら、どんな異常な光景だっただろう。

「お前、どう見たってあかの他人なわけないよなあ？だつて変身だトランスって使ってたし」

今度はイヴがなぬっ！？といった様子であたしに視線を送り始めた。非常に強い視線があたしの体に突き刺さる。

「ねえスヴェン。あの娘も一緒に泊めてあげようよ」

「まあ。そうだな。ここで会ったも何かの縁ってやつさ」

ズヴェンもにつこり笑っているが、かなりあの三人、ご都合主義の

ようだ。

だってあたし、まだ何も言っていないよ？

勝手にあたしと一緒に泊める相談までするなッ！！

とは言いがたい。

だって、宿泊代浮くし。

で、なんやかんやで泊まることになってしまった。

イヴとイヴ（後書き）

ついにブラックキャット登場です!!

イヴの覚醒 前編（前書き）

ちなみに、「あたし」が言ってる「イヴ」はトレインたちの仲間の方のことです。

分かってくれるとは思いますが。

イヴの覚醒 前編

結局あたしは、イヴと一緒に寝ることにした。

イヴは、初めての女の子でうれしかったのか、すこしはしゃいでいたような気がした。

寝るときには、あたしはイヴと一緒に寝ることになった。

あたしは、今日一日ですごい人物に会いまくった。

孫悟空（少年時）

ブルマ

トレイン

スヴェン

イヴ

あ、最後のイヴはあたしのことじゃないよ！

ついでに、なぜか知らないけど、トレインたちにもなぜか仲良くなれたしね。

「ねえ・・・」

となりから声が聞こえた。

あたしは始め驚いたが、イヴだと分かり、

「どうしたの？」

と尋ねた。

「あなた・・・。自分は本当は何者か、知ってる？」

イヴは突然、あたしにそう投げかけた。

無論、そんなものあたしが知ることじゃない。

「ううん。知らないわ」

「やっぱり・・・」

イヴは、あたしを見て言った。

「あなた。自分の本当の姿。知りたくないの？自分は何者か、知りたくないの？」

素直に、あたしは悩んでしまった。

イヴの言う通り、本当のことを知りたい自分がいる。

あたしが二人もいるのだ。

こんなわけの分からない状態、説明できるものならさっさとしてほしい。

でも、本当にそうなのだろうか？

あたしは、逃げ出してきたのじゃないのだろうか？

自分の真実に。

ここで今、掃除屋をやっている二人は、それぞれ過去がある。

昔に友人を、自分のせいで失い、その志を継ぐために右目を友人の目に変えた男。

かつては黒き猫として、秘密結社の抹殺者として、数えきれない命を消したが、一人の女性のおかげで、別な生き方を作った男。

この二人は、自らの行ったこと、運命に誠実に生きている。

あたしは本当にそうなのだろうか？

自分でこの体とどう向き合った？

あたしが初めて手に入れた自由。

ルフィたちに救われて、最後はドクターゲロを自らの力でとどめをさした。

あたしは、この体がなんのために存在するのか、本当に分かっているのだろうか？

「本当のこと、あなたはきっと知りたいはず。あなたのためにも、それがいい。明日。全てを知るわ。私の知りうるかぎりのことを、あなたに教えてあげるわ」

明日。

あたしはあたしを知る。

何か、すごく不安があたしを襲いだして、眠ることが出来なかった。

やって来たのは、人のいない場所。

森の奥深くのこの場所で、トレイン、スヴェン、イヴとあたし。なぜこんなとこにやって来たのか、イヴ以外のみんなは全く知らなかった。

「あなたは、私と同じだと思ってる？」

イヴはあたしにそう尋ねてきた。

あたしは首を横に振った。

「そう……。だったら。復活させてあげる。あなたの真の力を」

そう言うといきなり、イヴの体が変わ^{トランス}身した。

トランス
変身
ランス
銃

腕をとがった形に変換させた。

イヴはあたしに向かつて、それを突きだした。

腹に突き刺さり、あたしは後ろの木に顔を打ちつけた。

「あ、ああ・・・」

トレインもスヴェンも驚いたのか、イヴを止めようとしたが、イヴはこれでいいと言い張っている。

「いいの。これが、あたしみたいな人間を、もう二度と作らない唯一の方法なの」

イヴはあたしの方に向かって、無表情な冷たい目をみせた。

トランス
変身
ネイル
爪

イヴの髪が、おぞましい爪の形をした。

腹部に穴を開けられ、立つことすら出来ないあたしの肩に、大きな爪痕を残した。

「あがあああつー!!」

あたしはとても女の子とは思えないような喘ぎ声をあげた。腹部と肩から異様な量の血が流れてくる。

すでに立つような気力は、一片も残っていなかった。

ただ、ナノマシンの自己再生のおかげで、少しずつ回復はしていた。

だが、イヴがこれでは許してくれなかった。

髪の毛を大きな手に変身トランスさせると、あたしの体をつかみとった。

あたしは宙に浮いた状態になった。

貧血に陥っているあたしは、肩で息をするなか、必死に振りほどくうともがいた。

だが、その手の力は強く、簡単に抜けられるものではなかった。

「ぎゃあああああつ！痛い。痛いよお！」

その手は尋常じゃない握力であたしを握りつぶそうとしていた。

ギシッ

骨がギシギシと音をならす。

もしかしたらイヴは、このままあたしの体の骨を砕く気なのかもしれない。

だが、いつこうにあたしの体に力が入らない。

こうなったら、あたしも変身トランスで対応するしかない。

トランス
変身

ナノスライサー

あたしは髪の毛をナノまで研ぎ澄ました剣を作り上げ、彼女を第三の手を、切り取った。

しかし、あたしを支えるものがなくなった結果、宙に浮かぶあたしは、万有引力の法則に従って落っこちた。

地面にうつ伏せ状態で倒れたあたしに、イヴはさらに、最後のとどめを指そうとしていた。

「へえ」。あなた、ナノスライサーなんて出来るの？だったら、始めにその髪を剥ぎ取ってあげるわ」

イヴが、あたしの髪のを、せっかくの超ロングヘアを、ショートヘアに変えてしまった。

「さ。これで全部準備が整った。これでもう、あなたは自分の真価を発揮できるはずよ」

「！！？？」

この子は頭がおかしいのだろうか？

こんな状態でどう正体が分かるのだろうか？

あたしの体は全身痛み付けられまくった。

本当は変身で盾を作^{トランス}って守れたのかも知れない。

でも、あたしのナノマシンがそれを拒否した。

ナノマシンの共鳴というやつで、あたさの体は全く動かなかった。

腹部には血が流れて服にもべっとりとき、肩がやられているせいで、思うように変身^{トランス}ができない。

血の量は信じられない量が出たのに、まだ、貧血程度で生きている。あたしの体のナノマシンが、それだけは何とか正常に動き、血を作ってくれているのだろう。

体も少しずつ治ってはきているが、とてもスローペースだ。

寝て、回復に専念すれば、一週間もあれば治るはずだ。

「それより。あなた。今、どんな気持ち？」

「・・・？」

「自分と全く同じ能力の持ち主で、顔まで全く一緒の女の子に、体がどんどん痛み付けられてく気持ち。どんな感じ？」

次は言葉の虐めが始まった。

「あ、あなた……。あたしの正体を教えてくれるんじゃないの？」

「教えてあげたじゃない。今のあなた。そのまま。所詮あなたは、これほどまで弱いのだよ。相手に何されても身動き一つすらとれない。弱小な生き物よ、あなたは」

あ……。あたしが、弱小だと……？

このあたしに、そんな文句をつけるの？

あなたにどうしてそんな権限があるの？

何であたしが、こんなに弱いのか？

あたしは所詮弱小？

弱小なの？

弱小……

弱小……

弱小……？

あなたに、いや、てめえに、どうしてそこまで言われなくちゃならねえんだ？

てめえなんかにそんなこと、言われる筋合いなんかねえよ!!

「トレイン。あの子に電磁銃レールガンを撃つて。あたしの考えが正しかったなら、あの子は、そのとどめの一撃で、自分に目覚めてくれる!」

「姫っち……。それでいいのか……。?」

「うん。これは、あたしのような人間を、もう増やしたくないから。この子はあたしの幻影を纏ってるだけ。だから、そのあたしの幻影を追い払わなくちゃ。あの子も、あたしも、絶対後悔するもん!」

「姫っち……。よし。わかった。姫っちが言うなら、俺はやる」

「ありがとう。トレイン」

トレインは少し、笑ったが、そのあと、ハーデイスに対して、電気を溜め始めた。

一方あたしは、パワーが徐々に上がり、自分のなかの何かに目覚めたような気がした。

どんと、その何かがあたしの体に、力を加えていく。

少しずつ。

少しずつ。

「よし。充電完了!」

「トレイン。本当に大丈夫なんだろうな?」

「なんだよ？俺と何年もコンビ組んでのに信じられねえのか？」

「違う。女子供に暴力振るう人間は好かんからな。なるべく痛くない箇所を狙ってやれよ」

「スヴェン。それじゃだめなの。スヴェンの紳士道って言うの、私好きだけど、それじゃだめ。痛い。苦しい。怒り。それがあの子を覚醒させる秘訣。トレイン。心臓と頭以外ならどこでもいいから。頼むね」

「わかったぜ。姫っち！」

トレインは銃口を構えた。

その銃口は、真っ直ぐあたしを向いている。

「いくぜっ！！どおりやああああ！！」

ズドアアアアアアアアアアンツ！！

イヴの覚醒 後編

トレインから放たれた電磁銃^{レールガン}は、あたしの左肩に命中した。おそらくトレインがとつたのは、痛いのが致命傷になることはない箇所。

全身からの痛みが走るあたしからも、それはよく伝わった。だが、痛い全身の傷は、あたしが思うよりもずっと早く回復していた。

ナノマシンがパワーアップしたのか、あたしの肉体がパワーアップしたのは分からないが、とにかく、回復力が前よりも増していた。

「おめえら。少し調子に乗りすぎたんじゃねえか？痛い目みせてやるぞ。いますぐ」

「いや。それはないね。俺はお前の百倍強いからな！」

トレインの冗談があたしを笑い飛ばそうとしている。傷が治っているから安心したのだろう。本当の恐怖は今から始まると言っのに。

あたしの全身から、力が沸き上がる感覚が押し寄せた。

力？というか、何かとてつもないものが、体の内側から、外に漏れ出そうとしていた。

それは決して、軽く、柔いものなんかじゃなく、危険で、おぞましいものに違いない。

「こ、このパワーはい、いったい？」

あたしが自分の体を見る。

あたしの体は少し前より筋肉質になっていた。
男のそれとまではいかないものの、筋肉がつき、前よりも体がしなやかになっていた。

「言っただでしょ？あなたは私じゃないって」

イヴが口を開く。

あたしは何のことか分からず、首をかしげずにはいられない。

「私は、トルネオに、ティアーユ博士のクローンから作られた。『人工の人間』。言い方を変えれば、『作られた命』。でも、あなたは違うの。あなたは、ドクターゲロに作られた。いいえ、改造されたの。あなたは元々、ちゃんとした人間として、存在してたの。ドクターゲロは、ある日、空から降ってきたあなたを捕まえて、改造したの。ゲロとトルネオは、コンビを組んでいろいろやってたみたいだから、私にも情報が流れてきた。私は、この体で、何度か、苦労してきた。あなただってそうでしょ？」

あたしにそう言った。

あたしは頷くしかなかった。

「だったら、あなたは本来の、自分のあるべき姿に戻るの。あなたは、細胞をいじられて、少し、体の形を変えられた。ナノマシンを過剰に使用して、全部破壊したら、あなたを元に戻せる。私はそう思って、これをやったの。痛かったのは見れば分かるし、私にもはや敵意さえあるのも分かる。でもね。私はあなたを、同じ目にあわせたくないの！！」

イヴの目が、涙で光った。

イヴは、自分の体の辛さを知り、あたしを変えようとしてくれた。

あたしはただ、ひたすらに攻撃を受けただけだったけど、確かに、イヴの思いやりを持たれて攻撃されていた。急所は外されていた。

心理的な変化が、ナノマシンに多大な影響を及ぶのをしり、無理に非情な人を演じた。

あたしは、何に対して怒ってたんだろう？

あたしの溢れた怒りが、乾いていた。

あたしには敵意がなくなっていた。

しかし、体は大きく変貌し、イヴではなかった。

体は、少し筋肉が増し、しなやかに変わっていた。

髪の毛は黒に代わり、少し癖っ毛なのか、毛先が逆立っている。そして、何よりの変化があった。

腰の少し下辺りから、何やら、今までにない感覚のものがある。

それをよく見ると、手でもなく、足でもない。

見る限りでは、尻尾。

そう。

尻尾で間違いない。

茶色いふさふさした毛が生えたその尻尾を見て、あたしが、何者なのか。

頭の中から、高校生のあたしの記憶を呼び覚ます。

すると、ある登場人物があたまをよぎる。

逆立った髪。

尻尾。

黒髪。

サイヤ人とは思えない。

サイヤ人なら、最強のパワーを誇るはず。

あたしは、近くにある木を、軽く右拳で叩いた。
すると、

ズギズギズギズギ

木が折れてしまった。

「それがあなたの、本当の姿だったのね」

イヴもトレインも、スヴェンも、あたしに釘付けになっていた。

「イヴ。ありがとう」

「あなたもね。しっかりやりなよ」

イヴと別れを惜しみ、さようならといい、トランス変身が出来なくなった体
で、歩いてこの町を出た。

そのあと、天下一武道会で悟空と再開。

尻尾が生えたのと、髪の毛が黒髪になったことに驚いていたが、無
事に再開できた。

そのあと、あたしも仲間と認めてもらい、亀ハウスではなく、（え
ろじじいに変なことされたらいやだし）カプセルコーポレーション
に住むことになったのだった。

今のあたしがいるのは、さまざまな人と出会ったおかげ。

自由を手に入れさせてくれた海賊。

あたしに世界を教えてくれた少年。

あたしを目覚めさせた掃除屋。

彼らがいるから、あたしがいる。

守りたい。

この世界を。

いつまでも。

いつまでも……。

イヴの覚醒 後編（後書き）

「生体兵器の少女 Z」

に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8450t/>

生体兵器の少女

2011年9月8日18時05分発行